

謡森鈴音 *Suzune Utamori*

露出絶頂体験

街で、オンライン会議で、混浴温泉で……

わざと風にスカートをめくらせて下着をさらし、
カメラの死角で自慰をしてイキ顔を画面に映し、
温泉で至近距離から男たちに性器を見せて…

**三者三様の露出に濡れる
痴女たちの絶頂体験談！**

体験版

もくじ

強風の日ミニスカ散歩を
～結月の場合～

オンライン会議でリモート露出
～未羽の場合～

混浴露天風呂で見せつけて
～瑠衣の場合～

あとがき

混浴露天風呂で見せつけて ～瑠衣の場合～

道から舗装が消えたときはよっぽど引き返そうかとも思ったけれど、土の道を二〇分ばかり走らせて駐車場にたどり着いたところで、^る瑠^い衣はあきらめずに進んできた自分を褒めてやりたい気持ちになった。

（すごい……こんなに車があるってことは、温泉にもいっぱい人がいるってこと、だよな？）

ごくりと喉を鳴らし、ジーンズの上から下腹部を押さえる。これからその、まだ見ぬ大勢の他人の前で裸身をさらすのだと考えると、早くも腰の奥が疼き出すようだった。

なにがあるかわからないので、いざとなったらすぐに出せそうな位置に駐

車して、スマートフォンとハンドタオルだけを手に車を降りる。

まだ五月だというのに、降り注ぐ陽射しは夏のようにまぶしく、あたたかだった。それなりに標高のある場所なので寒さにそなえて少し厚着をしてきたが、そんな必要もなかったらしい。

（まあ……厚着の目的はもうひとつあるからいいんだけどね）

瑠衣は手のひらで目の上にひさしをつくり、駐車場の周囲を見回した。

「あれかな？」

遠くに案内板のようなものを見つけて近づいてみると、案の定、そこには目指す混浴露天風呂への道筋が示されていた。

案内板の脇から青々とした繁みに分け入り、ゆるく下っている土の道を踏みしめていく。

「わあっ……」

一〇メートルもいかないうちに視界が開け、瑠衣は思わず嘆息した。

向こう岸から迫り出した木々をバックに澄んだ小川が静かに流れ、その手前には幅の狭い川岸が左右に長く伸びている。

都会では見られない自然の美しさに心が洗われるようだったが、そのくらいではとうてい流しきれないほど強固に、瑠衣の心には汚れた欲望がこびりついていった。

実際、瑠衣が目を奪われていたのは清流ではなく、川岸の奥にちらついている裸の男たちの姿だった。

（ほんとにあった……こんな、なんにもない川のそばに、ぽつんとお風呂だけ……）

はやる気持ちを抑えつつ、瑠衣はそちらへ向かって歩み出す。

すぐそばまで来てみると、なかなか

に刺激的な光景だった。

（やば、男の人しかいない……それにみんな、当たり前だけど裸だし……やだ、あの人なんて全部丸見え……）

組み上げた岩でつくられた湯船のふちに、股間を隠さず堂々と腰かけている年配の男性を、ついまじまじと見つめてしまう。

（それもそっか、男の人しかいないんだもんね。そんな中でわたしも——）

そう、これから瑠衣もこの男性と同じように、いっさい身体を隠さずに入浴しようというのだ。

（だってここ、タオルも水着も禁止ってネットで見たし、だったら全部見えちゃってもしょうがないよね）

だからこそ瑠衣はこの温泉を選んだのだった。少しでも自然なかたちで裸をさらせるように。

「こんにちは」

あえて自分の存在を印象づけるように、瑠衣は先客たちに明るい声を投げた。

「ああ、こんにちは」

「お、若い子は珍しいね」

「今日のお湯はなかなかだよ」

赤い顔をした男たちが、次々にあいさつを返してくれる。どうやら地元の常連ばかりらしい。

「えっと、すみません。脱衣所は……」

「初めて？　そこだよ、そこ」

男が指さしたのは、湯船の脇に設えられた簡素な板の棚だった。まわりを覆うものはなにもなく、三方からの視線を防ぎようもない、脱衣所とは名ばかりのものだ。

「ありがとうございます」

たずねなくとも、瑠衣は脱衣所についてリサーチ済みだった。脱ぎ着が丸見えになってしまうというのも、ここ

を選んだ理由のひとつだ。

そして、厚着をしてきたもうひとつの目的も、この脱衣所にあった。

「ん……」

存在と行動を事前にしっかりアピールして、温泉につかる一〇人近い男たちの視線を自分に集めておいてから、瑠衣は衣服を脱ぎはじめる。

まずは羽織っていた薄手のコートを、それからブラウスを脱ぎかけて、ふと思いつき、先にジーンズを脱いだ。それだけでもう、下半身はパンツ一枚になってしまう。

（あぁっ、すごい解放感……でもこれじゃあみんなの反応が見えないな……ちょっと不自然だけども思いきって——）

瑠衣はくるりと身体を反転させて、湯船のほうを向いた。期待どおり、ほとんど全員が目が瑠衣に注がれている。

（めちゃくちゃ注目されてる……こんな中で一枚一枚脱ぐなんて……）

かすかに指を震わせながら、瑠衣はブラウスのボタンをひとつずつ、ゆっくりとはずしていく。こうして野外ストリップをするために、今日は厚着をしてきたのだった。

ブラウスの袖から腕を抜き、その下に着ていたキャミソールを焦らすように脱いだあとは、いよいよ下着の番だ。

男たちの視線を浴びながら、瑠衣は背中に手を回し、ブラジャーのホックをはずした。

（見られちゃう……見せちゃう……知らない人たちに、わたしのおっぱい……）

ゆるんだ肩紐から左腕を、それから右腕を抜いて――。

（んんっ、見てっ……！）

瑠衣は万歳をするような格好で、ブ

ラジャーを完全に脱ぎ去った。

バストが大きく弾み、その存在を必要以上に主張する。中心に色づいた薄茶の乳首に、痛いくらいの視線を感じた。

（気持ちいい……外で脱ぐのも、見られるのも、すごく気持ちいい……）

それでもまだ全裸ではない。大事な部分を覆い隠す邪魔な布が残ったままだ。

（脱いじゃう？ 前向いたまま、パンツも脱いじゃう？）

自問の意味もなく、瑠衣は迷わずパンツのゴムに指をかけた。するりと膝まで一気に下ろすと、秘部と布のあいだに細く糸が伸びるのがわかった。

（うわ、もうこんな濡れてたんだ……さすがにいまのは見えなかったよね……？）

かあっと身体が火照るのをごまかす

ように、薄布から素早く両足を抜いてしまう。

（はああ……）

全裸姿を男たちにさらして、瑠衣はふるふるっ、と身震いした。それから今度は湯船に背を向け、脱いだ衣服をきれいにたたみはじめる。まどろっこしいくらい丁寧に、じっくりと時間をかけて。

（お尻もいっぱい見てくれてるかな……）

あらわな背中を見知らぬ男たちと午後の太陽とにたっぷりさらしてから、ようやく瑠衣は湯船へ向かう。「タオルをお湯につけないでください」と棚にも注意書きがあったので、なにも持たず、身体を手で隠したりもせずに、堂々と裸身をさらしたままで。

「あ、かけ湯……」

そのままつかろうとして、気づいた。

（わたし、どんだけそわそわしてるんだろ……あ、でもこれ——）

瑠衣は湯船のかたわらに腰を落とし、地面に片膝をつく。そのまま脚を閉じていれば性器は見えないが、瑠衣は見せるためにここへ来ているのだ。木桶でお湯をすくいながら、立てているほうの膝をさりげなく、めいっぱいに広げて、今朝きれいに処理してきた無毛の股間を湯船に向かって見せつけた。

（これ、あそこまで開いちゃってないかな……角度的に中までは見えないだろうけど……）

何度もかけ湯をしてたっぷり性器を露出してから、いよいよ瑠衣は湯船に足をつけた。

「わ、結構熱いんですね」

両足をお湯に入れ、そんなことを言ってその場で立ったままたっぷり裸身をさらす。

「最初はそうかもねえ」

「すぐ慣れるよ」

男たちの声に、

「そうですか？　じゃあゆっくり……」

じりじりと腰を落とし、少しずつ、お湯に身を沈めていく。

ここまできるともう、最初のうちは多少遠慮がちに瑠衣を見ていた男たちも、堂々と、目を凝らして見つめるようになっていた。瑠衣のことを、裸を見られても平気な女性だと判断したのだろう。もちろん、願ったり叶ったりだった。

（見られてる見られてる……おっばいもあそこも、みんなにじろじろ見られてる……）

いくつもの視線にぞくぞくしながら、瑠衣は肩までをお湯にひたしていった。それでもまだ、男たちの目は瑠衣に向

けられたままだ。

（ネットの情報どおり……この温泉、透明だからこうしてても胸くらいは見えちゃうんだ……）

お湯の下を透かし見ようとするような目つきを感じつつも、

（ん……ここ、けっこういいお湯かも……）

瑠衣はいつとき本来の目的を忘れ、心地よい熱の中でリラックスした時間を過ごした。泉質などチェックもしていなかったけれど、うれしい誤算だった。

「へえ、東京から車でねえ」

「はい、山道って慣れないからちょっと怖かったんですけどね」

入浴客と言葉を交わしていると、しだいに身体が軽くなっていくのを感じる。自覚はなかったものの、思いのほか緊張していたらしい。おかげで少し

冷静になれた。

（そろそろ……しちやおうかな）

瑠衣は腰を上げ、湯船の縁に腰かける。

「ふう……あつつくなっちゃった」

右足をお湯から抜いて膝を立て、そこへ顎を乗せると、ぱたぱたと手のひらで顔をあおいだ。

（これ、ちょうどあそこがみんなの目線の高さに来て——わ、じーっと見てる……）

じいん、と秘部が疼いて、いったんは落ち着いていた鼓動がまたせわしなくなってくる。

「混浴、慣れてるみたいだね」

地元民らしい男性に、瑠衣は笑顔でうなずいた。

「けっこうあちこち行ってるんです。最初は恥ずかしかったけど、もうぜんぜん」

うそだった。混浴なんて今日が初体験だ。最初は恥ずかしかった、というのだって、瑠衣の場合は当てはまらない。

（でも、ほんとにあちこち行ってみるのもいいな……外で、しかもこんな明るいうちから裸になって、すぐそばで知らない人たちにあそこまで見てもらえるんだもん。こんなの最高すぎ……）

会話を交わしながら、瑠衣は左足も湯船から出して、完全にお湯から上がった状態になる。

（ここまできたらやれるだけやっちゃえっ……）

つづきは製品版で
お楽しみください

■サークル「破滅乱淫オーガズム」作品一覧

＊ 2026 年 4 月現在

◎既刊

- ① 委員長・静井莉子の露出自慰日記
～優等生のカゲキなイキぬき～
- ② ロリのふりして脱法露出！
合法ロリでも外で脱いだら違法です！！
- ③ 露出体験告白 1 イキすぎた公開絶頂
- ④ 着衣女性×露出男性 勃起見せつけ体験集 1
- ⑤ 時間停止能力を手に入れて露出オナニーを
満喫したら人生終了しちゃった話
- ⑥ 露出体験告白 2 痴女たちの全裸淫戯
(『全裸になりたいわたしたち 露出体験告白 2』改題)
- ⑦ 身動きできない満員電車でロリたちに
勃起を勝手に出されて射精させられた話
- ⑧ イメージビデオに出演したら挿入がないだけで
ほぼ A V みたいな撮影だった話
- ⑨ 着衣女性×射精男性 勃起見せつけ体験集 2
- ⑩ イトコのねーちゃんに女湯で射精させられて
家でエロいことしまくった夏の話
- ⑪ 露出痴女図鑑
- ⑫ 女の子が勃起チンポを見してくれるだけの本【J K 編】
- ⑬ 露出絶頂体験 街で、オンライン会議で、混浴温泉で……

◎近刊

- ＊ 露出体験告白 3 公然のイキ恥さらし
- ＊ 国民的清純派女優・浜瀬架帆
本気のセックスを映画として上映するため彼女は女優になった
- ＊ 男は誰もがチンポの虜 兜合わせ体験集
- ＊ 怪淫譚 心霊絶頂体験集
- ＊ 娘がアダルトライブチャットをしていたので
エロirikクエストをしまくった話

(近刊の発売順は変更になる場合があります)

★各電子書籍ストア、ダウンロード販売サイトにて発売中！

(ストア、サイトによっては規約の関係上、
一部扱いのない作品があります)